第二部　[昭和二〇年八月一六日～昭和二〇年一〇月六日]

八月一六日(木)晴れ

会社に行く。昨日、夕方、自転車に乗り町中を走ったがさほどの動揺は見えなく、只、男の人たちが二、三人集まって話している程度であったが、学校へ来てみると血気盛んな僕等若人であるために実に「ばくばく」たる騒ぎであった。皆は思い思いに議論を戦わす。しかし僕は母から厳しく止められていたので黙って観察していた。「ある者は政府がだらしない」とか、又、「どうしても一〇年で復興せねばならぬ」とか、全くすごかった。先生はさぞかし興奮されたのではないかと待っていると、やや遅れていらした。そうして話したところによれば、余り熱が無いのに驚く。僕は却ってその腑甲斐なさが気に障って仕様がなく、何を言っているんだと思わず口を走らさんとしたが、詔書中に「軽挙妄動せぬよう」と仰せられた陛下の大御心を思い返して止めた。又、他に何か熱いものが胸にこみあげるのを感じた。

八月一七日(金)晴れ

中村先生が、勤労課に報告に行かれてお帰りになったのが九時半の時を既に過ぎていた。